學界展望

パキスタン歴史學界の動向

——その一端の紹介——

近藤　治

パキスタン政府給費生として、私は一九六六年十二月半ばより一九六九年二月半ばに至る二年間餘（この間には一時歸國の期間を含む）、ラホール所在のパンジャーブ大學において歴史學とウルドゥー語を勉強する機會に際遇した。このときの經驗に基いて、彼地の歴史研究と歴史教育の動向の一端を紹介しようと思うが、東パキスタンには終に赴くことを得ず、從ってパキスタンといっても西パキスタンに重點がおかれていること、そしてこの動向を受止める筆者にもとより一面性や不十分さがあるやも知れぬことを、まえもって斷っておきたい。以下では、はじめに大學における歴史教育の現狀を紹介し、次いで獨立後約二十年間の歴史學分野における成果を顧て概觀し、さらにいくつかの顯著な學會・研究機關の活動について簡單に觸れたのち、最後に同國の歴史學界全體に共通して見られる諸特徴とそれらに關連していえる今後の課題といったものをも指摘してみたいと考える。

一　大學での歴史教育

パキスタンで史學科を有する總合大學は、西パキスタンでペシャーワル、パンジャーブ、シンド、カラチの四大學、東パキスタンではラージシャーヒー、ダッタ、チタゴーンの三大學、計七大學あり、すべて州立である。唯一の國立大學として現在イスラマバード大學の設置が進められつつあるが、今のところここには史學科はない。カレッジについて見れば大別して、我國の學部の如き存在として大學に直接包攝された大學内カレッジと、そうではなく各地に存在するも、卒業認定試驗等では七つの總合大學のいずれかの管轄下にある公私立併せた約二〇〇の一般カレッジとに別けられる。これらの一般カレッジでは、例外的に修士課程專攻科を有する極く少數の大きなカレッジを除いて、歴史學は、學齡からいって我國の大學教養課程に相當する二年間のいわゆる學士課程に必要な人文科學系の一環として教授されるのであって、歴史學を專門的に學ぼうとする者は、主として修士課程以降の教育に重點をおく大學の史學科に入學してようやく專攻できる制度になっている。つまり、學生はカレッジで他の必要科目と同時に歴史學を學び、修士・博士課程をおく大學でこれを專攻することができるというのが建前である。[1]

一八八二年創立のパンジャーブ大學はパキスタンでは最も古い傳統をもつ大學であり、東のダッカ大學とともに、イギリス植民地時代から存續してきた。在學者數も同國では最大の約六千。二十二の學科、三カレッジ（東洋學・法學・商學）、四研究所、六附屬研究施設を有している。このうち學生募集を行い授業するところは各學科、カレッジ、および研究所であり、これらはほぼ同格として大學内に位置づけられている。すなわち、大學を構成する單位機關としてカレッジ（またはスクール）や研究所があるというイギリス流の傳統的大學制度の上に、アメリカ流の獨立した學科制度が新しく添

加されてきたために、入組んだ機構を生み出しているのである。

さてこの大學の史學科修士課程在學者は一學年六〇人前後で計約一二〇名であった。教官は教授一、助教授一、講師四、非常勤講師二、總數八人ですべての授業を擔當する。學生は初年度において必須四科目、つまりインド・パキスタン近代史（一八五八―一九四七）、近代イスラーム世界史（一九一九―五七）、イギリス史（一七一四―一九一九）、比較憲法論の授業を受け、次年度においては五番目の必須科目である國際關係論（一九一九―六二）の他に、三つのコースのうちいずれかを選擇し、その所屬コースにおいて三科目を受講する。三コースとはインド・パキスタン史コース、イスラーム史コース、ヨーロッパ史コースである。インド・パキスタン史コースを選んだ學生は前ムガル史（一二〇六―一五二六）、ムガル史（一五二六―一七〇七）、後期ムガル史（一七〇七―一八五八）の三講義、イスラーム史コースではウマイア・アッバース兩朝史、イスラーム文明・制度史、オスマントルコ・サファヴィ兩朝史の三講義、またヨーロッパ史コースではヨーロッパ史Ⅰ（一七八九―一八三〇）、ヨーロッパ史Ⅱ（一八三〇―一九一九）、アメリカ史（一七八三―一九五六）の三講義を受けなくてはならない。各講義は五〇分授業で週五回行われる。

講義はすべてノート講義で、演習・講讀は一切行われない。學生は筆記したノートを丹念に暗記して所定の八科目の試驗に四割以上の成績で合格すれば、修士號が授與される譯である。インド・パキスタン史並びにイスラーム史コースを選んだ學生は二科目に代るものとして論文を提出することができ、週一回主任教授による論文指導が行われるが、例年その數は少く三人から五人程度である。一回生、二回生とも小グループに分かれて、毎週一回各專任教官の研究室に集まり、教官から勉學上、生活上の相談を受けることになっており、論文コースを取らない一般學生にとってはこれが教官との唯一の自由討論の場であった。

修士課程の必要八科目のうち五科目が必須で、しかもそれらが政治學科の必須科目とほぼ等しい內容のものであり、さらに與えられた講義題目の時代のすべてを忠實にカバーする通史的內容であること、このことは他でもなくイギリス支配時代の高等文官（I・C・S）の遺制であるパキスタン高等文官（C・S・P）の試驗制度から逆規制されたものである。[8] かくして、學生は修士課程ではじめて歷史學の專攻が可能だといっても、その實は歷史學の特定分野を深く究めようとする以前の段階、つまり一般的歷史知識をやや深く廣く得たままの狀態で卒業してしまうことになる。しかも奇異に思えることは、自分たちの文化遺產に深く係わる史料（特にペルシァ語文獻史料）の操作やその講讀が全然行われず、古代史も手懸けられていないことであり、また外人教官こそいなくなったが外國語であることに變りはない英語によって今だに授業がなされ、そして歐米のインド・パキスタン史に關する研究書が依然無批判的に使用されたり、外交斷絕關係にあって非難されること甚しいインドの歷史書がそのまま受入れられたりしていることである。

こうした史學科の實狀にいささか反省が加えられ、昨年九月の新學年度からは、カリキュラムの改革が實施された。これによると、必須五科目は(a)史學史、史學研究法(b)イスラーム・インド史（一二六〇―一七〇七）(c)インド・パキスタン史（一七〇七―一九四七）(d)パンジャーブ史（一七九五―一九四七）(e)國際關係論（一九一九

—六五）となり、選擇專攻コースはイスラーム史、アジア史、ヨーロッパ史、米・ソ・アフリカ史、論文の五つのコースに分けられている。講義に史學科の特色を生かそうとした試みであり、新しく史學理論やパンジャーブ史が必須講義となったことや、アジア史コース（中國史、日本史、東南アジア史）が設けられていることなどは、注目されよう。しかし同學科が機構的にも內容的にも改革されない限り、右に觸れた問題點や、同一教官がインド史とヨーロッパ史やその他の講義を兼併して行なうという今までの事態はそのまま持越されそうである。

一九五一年に新設されたカラチ大學は、史學科の充實に一つの重點をおいて、教官にかなりの人材を集め、授業內容もパンジャーブ大學より豐富である。ここでその詳しい紹介は省略するが、修士一年ではインド古代から獨立までを四つの時期に區分してそれぞれ一科目となし、これにヨーロッパ史を入れて計五科目が必須。二回生に進んでインド・パキスタン史、ヨーロッパ史、考古學の各グループまたはこれらの混合グループのいずれかに所屬して四科目選擇することになっている。そして論文提出希望者もどれかのグループに所屬して三科目を受驗しなくてはならない。

以上のようにこれまで主として制度上の問題より大學における歷史教育の現狀を述べてきたが、その教育內容の特徵は、イスラーム的、パキスタン的觀點から見たインド・パキスタン史が重視されていることであって、このことはイスラーム教徒の多數派的地域がインドから分離して獨立を得たという同國の成立過程からいっても、理解できなくはないだろう。

二　注目すべき若干の成果

大學における歷史教育の現狀からも推測できるように、パキスタンの歷史研究活動はまだ極めて不十分な發展過程にあるといえるが、こうした中にあっても注目すべき研究成果がない譯ではなく、それらをいくつか指摘することができる。

はじめにインド・イスラーム文化史については、これを思想史的觀點から扱ったS・M・イクラームの三部作『仙泉の水』『仙泉の流れ』『仙泉の汪溢』が擧げられる。[8] 全體で一五〇〇ページに及ぶこの書は、その初版が一九三七年ボンベイから出版されたが、その後度々改訂と增補が加えられ第七版としての現在の形と內容を持つに至った。著者は獨立前、インド高等文官としてインド政廳に勤め、印・パ分離後はパキスタン政府の役人として在職していたが、現在は退官しているようである。彼には英文の著書（共著を含む）やペルシァ語文獻[4]およびそのウルドゥー語譯の監修などの業績もいくつかあるが、この三部作が主著であることには變りない。

この著は八世紀初のアラブ侵入から今世紀のイクバールに至る期間のインドにおけるイスラーム教徒の知的活動を中心とした文化史・精神史を論述しているが、廣い範圍の對象を體系立てて叙述している點で他に類書を見出すことは難しい。インドにイスラーム文化が如何なる經過をとって波及していったかを、各時代の代表的イスラーム思想家を取出し、その說を紹介しながら跡づけていくとともに、イスラーム教がインドの社會構造に及ぼした影響、スーフィーおよびその教團の役割についても詳しく觸れている。時代的に見ると、第二卷のムガル朝を扱った部分が最も充實しているが、近代史

の部分についてもアリーガル學派、デオバンド學派の二大インド・イスラーム思想潮流を克明に描き出しているのをはじめ、イスラーム改革運動にも觸れ、このため現代のインド亞大陸におけるイスラーム思想的諸潮流の源流を探る上では缺かせぬ存在となっている。しかし、著者はイスラーム教傳播を受容したインド社會内部の構造的な要因、ヒンドゥー文化との相互規定性の問題、インド・イスラーム思想の時代的變化とそれが民衆との間にもったかかわり合いの問題等は不十分にしか述べていない。また著者の史料操作の不徹底さを指摘する學者もいる。[5]

現在カラチ大學の學長をしているI・H・クレーシーは「インド・イスラーム社會のもついくつかの思想潮流の歴史を跡づけよう」と試み、インド・イスラーム史の初期段階から印・パ獨立までのこの社會の文化史的通史を發表した。[6] 著者はその中でムスリム支配の性格、非イスラーム教徒との關係、宗教指導者の國家に與えた作用などを檢討しているが、イスラーム社會またはイスラーム社會集團としての獨立した經濟的基盤、つまりそれなくしては著者の言う社會集團がインドで存立しえなかったところの基盤、がはたして存在したのかどうかについては全然述べていないところが決定的弱點となっている。この他アジーズ・アフマド『インド界域のイスラーム文化研究』がある。[7] この本の著者は、インドのイスラーム文化を他のイスラーム世界との關連において論じつつ、ヒンドゥー文化と明確に對置し、兩者を平行して流れる二つの異質な流れにたとえ、雙方が接近することはあっても合流はしないとする考えを貫いている。この見方は、強弱の差こそあれ、パキスタンの歴史研究者に共通して見られるものである。

次に、パキスタン運動史あるいはインド・イスラーム教徒の解放運動史の研究について觸れてみよう。この分野の歴史研究が、實は今日のパキスタンでは最も盛んである。

A・H・バタールウィーは三年前に『イクバール最後の二年間』、『わが民族闘爭』の二著を發表した。[8] 前者は、イスラーム教徒多數派州のインドからの分離を大膽に打出してパキスタン建國構想の強力な一先鞭をなし、國民的詩人・思想家として敬愛されているイクバールの死に至る晩年二年間の政治活動を、彼と緊密な接觸をもっていた著者の眼に映った諸事件とともに、記錄したものである。そして著者は、イクバールがパンジャーブ地方におけるムスリム連盟の大衆化に盡した役割、並びに連盟議長のジンナーに與えた効果的な支援の内容を明らかにし、一九四〇年連盟のラホール大會において採擇された歴史的な建國決議に僅か數年先行するこの時期に、その條件となる地盤が形成されていったことを論證しようとした。

『わが民族闘爭』はイクバール死去の年（一九三八）、つまり第二次大戰勃發直前における連盟の活動およびこれと會議派との關係を、主としてジンナーとガンディー、ネルーとの往復書翰を手懸りにして扱い、同年末の連盟パトナ大會の記述で終っている。序文によれば、著者はパキスタン運動史に關する數冊の著書刊行を計畫中であり、この書はその第一卷として出版された。著者バタールウィーは右の二つの著書で、イギリス植民地主義の對インド政策、その支配・搾取機構の綿密な論證的究明、並びにこれと闘った人民の闘いの前進を明らかにしていくことなどよりも、むしろヒンドゥー教徒の多數派支配、その政治的代表機關に過ぎなかったとする會議派に對するイスラーム教徒と連盟の抗爭を重視し、あたかもこれ

を「民族闘争」としているかの如くであるが、實はこうした歴史的觀點はひとりこの著者に限らず、パキスタン運動史を扱った同國の研究者の多くに共通して見られる觀點なのである。S・H・リヤーズの『パキスタンは不可避であった』はこうした傾向を示す一つの典型である。[9]

同じくパキスタン運動史を扱った著書には、この運動とイスラーム的宗教指導者ウラマー層との關係に焦點を當て、後者の果した阻止的作用を一九三〇年以降の時期においてひとつひとつ取上げて檢討し、嚴しいウラマー批判を行ったC・H・アフマドの研究と、この批判の對象になったウラマー層の中で一大勢力をなすマウドゥーディーの著書とがあり、この兩者を併せ讀むことは興味深い。[10]このうち後者では、パキスタン運動におけるイスラーム教徒とイスラーム思想との在り方を中心的に論じ、會議派と聯繫した際にそれが受ける内在的危險性を指摘するとともに、連盟の主張するパキスタン構想にも反對して、イスラーム教徒の世界的一體論を主張した。彼が一九四一年に創始した新興宗教結社ジャマーアティ・イスラーミー Jamā'at-i-Islāmī は現在パキスタンにおいて隠然たる社會的勢力を有し、創始者の彼もいまだ健在であるが、民衆の間ではこの一派を宗教的反動層の旗手と看做し、批判する聲が強い。[11]

S・ヌール・アフマドの『戒嚴令から戒嚴令まで』[12]は、一九一九年の民族運動彈壓法＝ローラット法の施行から五八年のアイユーブ・ハーンによるクーデターに至る四〇年間の政治史を扱ったものであるが、史料的に興味深いものを含んでおり、パキスタンの歴史研究者の間で最近好評を得ている。[13]

ベンガルつまり今日その一部が東パキスタンとなっている地方の歴史については、セポイの反亂に先行するイギリス支配時代百年間のベンガル地方におけるイスラーム教徒の解放運動史に關するアブドゥッラー・マリクの秀れた論著がある。[14]この本では、イギリス侵入による在來の經濟制度の改變と搾取の增強、東インド會社と結びついたヒンドゥー地主＝商人の創出による新しい階級關係の出現、農民闘争と山岳部族の反亂の進展、ヒンドゥー社會とイスラーム社會の相互關係、イスラーム教徒解放運動の思想史的背景等が體系的に述べられており、インド近代史を學ぶ者に一つの有効な方法的提言をなしていると考えられる。[15]

インドにおけるガンディーとタゴールの如く、パキスタン人の多くが尊敬の念を拂う國父ジンナーと詩人イクバールに關する研究書、傳記、演說・作品集もかなり出ているが、この二人を見る基本的觀點も右に述べたパキスタン運動史を見るそれと變らないと考えるから、それらの紹介は省略する。デリー・サルタナト史やムガル史の個別的研究は、制度史的研究を含めても、まだ極めて少い。[16]そして、現狀は當時の史料であるペルシァ語文獻のウルドゥー語譯が盛んに行われている段階と言うことができる。これらの飜譯文獻の中には史料的にいって重要なものも含まれてはいるが、イギリス人が刊行してきた史料集成ビブリオテカ・インディカ・シリーズ中には寫本上の誤謬や誤譯が心ある研究者たちによっていくつも指摘されている現在、今後の研究の定本となるべき諸文獻の原文による體系的な出版作業こそが、ひとりパキスタン・インドの研究者のみならず外國の研究者によっても強く望まれている。

最後に、パキスタンの歴史學者の共同執筆になる歴史書刊行の二例を擧げておこう。一つは、パキスタンの多くの歴史學者を結集し

て一九六〇年前後にカラチのパキスタン史學會によって出版された『解放運動史』（全四卷、うち三卷五冊が既刊）であり、いま一つはI・H・クレーシー監修の下に最近刊行された『パキスタン小史』（全四卷）である。[17] 前者はカラチ大學史學科主任教授マフムード・フサインを議長とする編集委員會が編集したもので、アウラングジーブの死からパキスタン獨立までの歷史をイスラーム教徒の諸運動を中心にして總合的に叙述しようと試みたものであり、後者は主として學士課程の學生用教科書を兼ねて出版されたもので、その執筆には東西パキスタンの老練な歷史學者が當っている。『パキスタン小史』は、その卷頭語において監修者自らが一國史的過程をもった統一體史としてのパキスタン史を、インド史とは別個のものとして書くことが果して可能かとの問いを提示しながら、インダス文明から現在に至るまでの東西兩パキスタンの全體史を叙述し切ることを通して、敢えてこの問いに答えようとしたものである。こうした通史はこれまで發表されたことがなく、從ってこの意味でこの書の刊行は、パキスタンの歷史學界の動向の上に一つの畫期を與えるものとなるのではなかろうか。

三　學會および研究機關

今日のパキスタンで最も活潑な活動をしている歷史學會は、カラチ大學の Pakistan Historical Society とダッカ大學の Asiatic Society of Pakistan の二つである。まずパキスタン史學會は一九五〇年に發足したもので、季刊雜誌 Journal of the Pakistan Historical Society を定期的に發行するのみならず、現在までに四〇を越す書物の出版を行ってきた。それらの中には、先に述べた『解放運動史』の他に、個別研究書もあり、またムガル朝史、インド・イスラーム史に關するいくつかの文獻のウルドゥー語譯、英譯、さらにはペルシァ語史料文獻の出版も若干含まれている。近い將來には、インド亞大陸におけるイスラーム教徒の社會・文化・經濟・政治・宗教等全分野にわたった數卷にのぼる歷史書の刊行を計畫しており、またI・H・クレーシーもイギリスの研究者と合同してより包括的なパキスタン運動史の執筆を準備しつつあると聞く。

この史學會の協賛のもとに、一九五一年より毎年一回パキスタン歷史學協議會 Pakistan History Conference を開催し、昨年で第十六回大會を迎えた（一九六六年のみ不開催）。この協議會はパキスタン各地の歷史研究者が會合する唯一の全國的學會大會としての性格を持ち、開催場所もカラチを離れてラホールやダッカに移されたこともあった。この大會での參加論文、討議・決議事項等の報告書は、パキスタン史學會が發行責任をもっている。

ダッカ大學の歷史學會は、その名からしてイギリス時代の Royal Asiatic Society of Bengal の傳統を繼承しようとしたものと考えられるが、ここでも雜誌 Journal of the Asiatic Society of Pakistan を定期刊行し、また地域柄からしてベンガル地方史に關する研究書や史書とベンガル語譯、アフガン族支配に關するペルシァ語文獻史料などを出版してきた。パンジャーブ大學にも古く一九一〇年より續いている Panjab University Historical Society があり、雜誌 Journal of the Panjab University Historical Society を發行してきた。しかし現在その活動は沈滯し、學生と教官との親睦會的催しを年一回行うだけで、雜誌もここ二年間は休刊されている。

西パキスタンの主要な地方語であるパンジャービー、パシュト

ー、シンディー、バローチーに關する研究所もいくつか存在し、そこで各地方語の文學的、言語學的研究や地方史研究もいくつか行われているが、パキスタンにとって言語上最大の課題は東西パキスタンの國語とされるベンガル語とウルドゥー語の普及にある。このために兩言語の普及促進を企圖した研究機關が設立され、そこからも同國語による歴史書や飜譯書、あるいは僅かながら原典史料そのものが刊行されつつある。

ウルドゥー語についていえば、中央政府管轄下に一九六二年ラホールに開設された中央ウルドゥー語院 Markazī Urdū Board があり、ここで『西パキスタンの歴史』の發行が計畫されて、その古代史の部分に相當する第一卷が既に出版された。[18] この他ペルシァ語文獻の飜譯、西北邊境州並びにベンガルにおけるスーフィー運動史を發表し、歴史書の出版事業にも力を入れている。またラホールにある西パキスタン州立のウルドゥー語文學促進會議 Majlis-i-Taraqqī-i-Adab やカラチにあるウルドゥー語促進協會 Anjuman-i-Taraqqī-i-Urdū は、ウルドゥー語の促進・發展の事業を行うのみならず、多數にのぼるウルドゥー語古典や研究書、その他歴史書や若干の史料文獻の出版も行っている。[19]

パンジャーブ大學の歴史研究所 Historical Research Institute は、同大學に附設されてから約五年間しか經過していず、現在S・R・ワスティー所長と四人の專任研究所員がいるが、その研究成果としてはまだ何も發表していない。目下イギリスからマイクロ・フィルムを取寄せて近代史史料集（英文）の作成を急いでいるところである。同じくパンジャーブ大學の Oriental College は、Fort William College（カルカッタ）、Delhi College、Sientific Society（アリーガル）と並んでインド・イスラーム教徒の知的運動の一中心的役割を果したことのみならず、中央アジア探檢で有名なM・A・スタインが校長兼サンスクリット學教授として一八八八年より十一年間在職していたことでも我々に親しい存在であるが、現在ではウルドゥー語、ペルシァ語、アラビア語の三學科をのみ有するものとなった。そしてここでは主として文學や言語の研究と教育が行われている。「パキスタン學科」新設の動きがあるが、昨年中にはついに實現しなかった。これが新設されれば、パキスタンの政治、經濟、文化の研究とともに、歴史の研究がこのカレッジでまた再興されることになるかも知れない。

イギリスの植民地時代やそれ以前の時代の貴重な史料は、その多くがイギリス人によって本國に持去られたり、殘存するものも各地に未整理のまま散在していることが多く、このことがパキスタンの歴史研究者に大きな障害を與えている。そうした中で、西パキスタン州政廳内にある史料館 Record Office は例外的に豐富な史料を集めているところと言うことができる。ラホールは舊英領パンジャーブ州の中心であったところだけに、この史料館にはパンジャーブ地方に關するイギリス人の書簡・布告類がそのままの形でよく保管されており、近代史の研究には缺かせない所となっている。そしてまた古い時代の寫本や、獨立後の史料度の高い文獻、誌紙も保管されているため、外國の研究者でここを訪れる者も少くない。

四　特徴と課題

特徴點の第一は、強烈なイスラーム的觀點から歴史の研究、教育が行われていることである。住民の大多數がイスラーム教徒であ

り、建國の過程やその精神も深くイスラーム教に規制されていること、並びにイスラーム教そのものが個人の精神領域のみならずその日常生活、そして廣く社會の在り方にも強い規範力を有する宗教であることから、このことが理解困難な譯ではない。インド・イスラーム史の研究は大いになされなくてはならないし、自國の歴史を自らの手で發掘、再構成し、正しい歴史像が作り上げられていかねばならないことも、もとより當然である。

だが、相も變らずヒンドゥー教徒との鬪爭、ヒンドゥー多數派の抑壓からの解放を強調するモティーフを何よりも先行させるという限りでは、[20]歴史學は民衆の舊い意識にのっかったまま、印・パの支配階級が自らの階級的利害のために宣傳する兩國間の敵對感を增強する方向に、國民の歴史意識を動員することによって寄與していると見られても致し方がない。[21]階級關係の分析が全く缺落したこうした觀點の存在は、揚棄されねばならなかったはずのコミュナルな見方が依然引繼がれてきたことを示すものである。[22]

イスラーム教は、その發生期においては一つの極めて革新的な普遍的思想としての性格を持ち、そうであったが故にアラブのみならずその周邊の民衆の中に急激に浸透して巨大なイスラーム文化圏を形成し、科學・藝術等の發展に促進的な役割を果したことが事實としても、今日ではイスラーム諸國の支配イデオロギーに化していることは疑いのないところである。從って、人民に依據しつつもその意識形成の上に新しい方向性を與えうるような歴史學、在來の傳統的イスラーム的價値體系に對して眞正面から批判を加える魯迅的、ゴリキー的眼をもった歴史學の登場が期待される所以であるが、殘念ながらこうした歴史學運動を支える文化的土壤自體が全く未成熟の段階にあるといえる。

第二點は、研究對象の上で、パキスタン運動史＝インド・ムスリム解放運動史と、インド・イスラーム文化史の比重が壓倒的に高く、逆に社會構成史、經濟史の研究が、一部ベンガル史のそれを除いて、皆無に近い狀態であることである。[23]

パキスタン運動史はその多くがセポイの反亂から以降の時期として叙述されるが、ではそもそもパキスタン史というものがいつから始まるのであろうか。これには『パキスタン小史』の如く、今日同國の領土となっている地域の歴史を太古から說き及んで來る例もあるが、一應これはおくとしても、現在のところ大きく三つの考え方が指摘できる。それらは一、イスラーム教のインド移入以降說、二、セポイの反亂以降說、三、パキスタン構想が顯在化した一九三〇年代以降說である。このうち第二、第三の說はパキスタン史卽パキスタン運動史と考えるものである。中には、現在のパキスタン領土内に居住していた多數のインド人住民がイスラーム教を受容した段階からパキスタン史は始まるという見方を取る人もあるが、最近では始期をできるだけ古い時代に求める傾向にあり、今後は『小史』や『西パキスタンの歴史』のようにパキスタン史をインダス文明から始め、その中にこれまでのインド・イスラーム文化史やパキスタン運動史が包み込まれてしまった通史が多く書かれていくのではないかと考えられる。

現在、パキスタンではナショナリズムが強いが、内容的には國家主義的性格をもつもので、イスラーム思想やこれにまつわるさまざまの支配イデオロギーがそれを補強している。[24]そしてこうした國家主義的な特性を過去の榮光の中に求めようとするところから、イン

ド・イスラーム史、パキスタン運動史の叙述が大半を占めていると理解できる。パキスタンにおける歴史研究の特徴的な方法、つまり歴史上の事件なり個人を取上げ、これらをイスラーム的な硬直した評價または著者自身の主觀的判斷に基いて褒貶するというやり方に對して、S・A・ラシードは「情緒的な接近法」とか「バランスの缺如」というが、[26] 問題の本質はそういうところにあるのではなく、今日のパキスタンの精神的風土と科學的歴史學の發展度とに懸っているのである。

第三に、大學教育が英語でなされていることと併せて、歴史研究の成果が、多くは依然英語で發表されている。このことは、パキスタンの（そしてまた同樣にインドの）歴史學界の姿をある意味では特徴的に示しているといえるであろう。歴史學者の中にはパキスタンやインドでのみ教育を受けた者もあるが、多くは留學經驗者であり、この傾向はまだまだ續いている。彼らのイギリス、アメリカ等への留學は毎年跡を絶たず、歸還者の多くはそのまま大學の教壇に立つ。[27] 歴史學に限っていえば、彼ら留學生の論文テーマはまずその百パーセントがインド・パキスタン史に關するものである。つまり自國の歴史について書いた論文をイギリス人やアメリカ人學者に審査してもらい、首尾よく學位を取って歸國すれば、權威者として大學で歴史學を講ずる譯である。

このことは、歴史學が、自分たちの母國語さえまともに讀めない大半の國民とどういうかかわりを持つかという問題と不可避的に關係する。端的に言ってみれば歴史學が自國の廣範な人民の外に向って開かれ、肝腎の彼らに對しては背を向けているという傾向を物語るものであって、深刻な事態と考える。

こうした事態は、もとよりイギリス植民地支配の根深さから來たところの歴史的産物でもあるが、自國の人民に責任をもった研究を進めようとするパキスタンの歴史研究者である限り、先んじてこうした傾向を改めていかなくてはならないだろう。

第四に、豐富な歴史研究活動を支える人的、物的な組織的基盤が、インドと比較してみても、はるかに遲れている。歴史研究者の層も淺いし、これを組織しその活潑な批判と討論を保障する學會活動も不十分であり、從って眞劍な歴史學的論爭というものも寡聞にしてかあまり知らない。秀れたイスラーム的修史學の傳統を再現しようとの呼びかけもなされているが、大學での歴史教育は、既に見たように公務員試驗の受驗を前提としたような制度と內容をもち、從って學生に歴史研究に對する興味を抱かせ、そして彼らに研究者として自立していこうとする意欲を涵養させるに足る十分なものであるとはいえない。

今日パキスタンの歴史研究者は、自分たちが直面している大きな問題として、史料の入手困難さがあるとよく語る。確かにセポイの反亂中だけでも、多くの寫本・記錄・文獻類が散佚したし、それ以上に多くの貴重な史料が長期にわたってイギリスをはじめ歐米諸國に持ち去られていった。そして殘存中のものも散在していたり、保管・整理が行屆かない狀態にあって、一般の歴史研究者の利用しにくい存在となっていることも否めないだろう。しかし、歴史研究活動が不振なのは、なにも史料の入手困難さに起因するのではなく、史料は現に保管されたり出版されているものだけでも未着手の厖大なものがあり、今後研究が進んでいけば續々發見されていく可能性をもつものであって、史料不足という一つの問題にしても、歴史研

究活動の不振さ、その組織的基盤の未成熟さにこそ、まさに起因すると考える。

とはいえ、パキスタンにおける歴史學の新たな發展は、これまで概略述べてきた如きその現狀からの出發しかありえない。パキスタンが獨立してからようやく二十年を經過したのと同樣に、その歴史學界も若く、蓄積も多くない。だが、パキスタンの歴史學を發展させるものは、この國の研究者をおいて他にはなく、彼らにその個有の資質として、權利と責任が與えられている。アジア史の、そして廣く外國史の研究を我々が志すとき、自明のことながら當該研究對象國における歴史家の爲し遂げた成果やその發言に十分な考慮が拂われなければならない。この故に、インド・パキスタン史についても我國で可能な特色ある研究が一層進められることを希望する學徒の一人として、パキスタンにおける歴史學研究の發展を期待しつつその動向の一端を紹介したものである。

（一九六九・六・一六）

註

① これと併行して、大學によっては史學科に三年制學士課程を設けているところもあり、この場合は二年制カレッジで得た學士（B.A.）と異って B.A. Honours と呼ばれ、修士課程もあと一年間で修了することができる。筆者の留學當時カラチ大學にはあったが、パンジャーブ大學史學科にはこの制度は設けられていなかった。また、博士課程の在籍者は極端に少く、例年各學科で多くて一人。指導教官との接觸を通した自主的研究をするのみで、登錄後五年以内に論文提出の義務を負う。パンジャーブ大學史學科には筆者を含めて二名しか在籍していなかった。

ところでパキスタンの教育制度は、日本の六・三・三・四制と違って、大まかに言えば五・三・二・二・二・二制十六年間の教育期間で修士課程まで修了することになっている。前半の十年間を終えたところで一段落があり、續く四年間はカレッジ、そして最後の二年間は大學で、それぞれの教育が行われる。だが人口一億一千のパキスタンで識字率は僅かに約十五パーセントを占めるに過ぎず、そのうち半分以上の者が小學校までの教育で終っている事實は注目を要する。從って、大學在學者數は、東西兩州にそれぞれ一校ずつ設置されている工業大、農大を含めた全十一校を合せても二萬強に過ぎない。但し、大學に在籍せずして卒業認定試驗に合格さえすれば、學士・修士號の收得者として認められる制度もあるが、この數字にはこうした受驗者および一般カレッジ在學者は含まれていない。（cf. Twenty Years of Pakistan, Karachi, 1967. p.417.）

② 大學における歴史教育が單に硬直した官吏採用試驗制度の合格を目指したものに過ぎない狀態にあることは、六年前に當時パンジャーブ大學の史學科主任をしていたS・A・ラシードが指摘していた。（cf. Shaikh Abdur Rashid, Report of the Seminar on the Teaching of History, Panjab University, 1963. p.2.）

③ Shaikh Muḥammad Ikrām, Āb-i-Kauṡar, Rūd-i-Kauṡar, Mauj-i-Kauṡsar, Lahore, 1967 (7th edn).

以下ウルドゥー書に限って著者名も忠實に寫音するが、英文

のものに關しては著者自らが用いた綴り法に従う。

④ do., Modern Muslim India and the Birth of Pakistan, 1858–1951, Lahore, 1965.

do., Darbār-i-Millī, 2 vols. (Compilation in Persian & Urdu), Lahore, 1961 & 1966.

do. with S. A. Rashid, History of Muslim Civilization in India and Pakistan, Lahore, 1961.

⑤ イクラームと同様文化史を扱うも、これをイギリス植民地時代（プラッシーの戰いから一九三〇年まで）に限って制度史的に扱ったものに、これまた最近再刊されたユースフ・アリーの著（一九三一年初版）があるが、これは司法・出版・教育・慣習・社會的結社等がこの時代にどのような變容をなしたかを、主に歐文獻に據りながら簡略に記したもので、教科的概說の域を出ていない。（'Abdullāh Yūsuf 'Alī, Angrīzī 'Ahd mēn Hindūstān kē Tamaddun kī Tārīkh, Karachi, 1967.）

⑥ Ishtiaq Husain Qureshi, The Muslim Community of the Indo-Pakistan Subcontinent, Hague, 1962.

⑦ Aziz Ahmad, Studies in Islamic Culture in Indian Environment, Oxford, 1964.

カラチ大學系で組織しているパキスタン史學會 Pakistan Historical Society の幹事をしているムイーヌル・ハクも同様の文化史の分野で平易な歴史書を發表している。書名のみここに記しておく。S. Moin-ul-Haq, A Social and Literary History of Indian Muslims, 711—1707, Karachi, 1966.

⑧ Āshiq Husain Batālwī, Iqbāl kē Ākhirī Dō Sāl, May 1936 —April 1938, Karachi, 1966.

do., Hamārī Qaumī Jidd-o-Jahd, May 1938 —December 1938, Lahore, 1966.

⑨ Sayyid Ḥasan Riyāz, Pākistān nā-Guzīr thā, Karachi, 1967.

⑩ Chaudhrī Ḥabīb Aḥmad, Taḥrīk-i-Pākistān aur Nationalist 'Ulamā', Lahore, 1966.

Sayyid Abū-'l-A'lā Maudūdī, Taḥrīk-i-Āzādī-i-Hind aur Musalmān, Lahore, 1964.

⑪ マウドゥーディーおよびその一派に對する最も嚴しい批判はマルクス主義者F・D・ランスールによって行われた。彼は、一九五四年七月共產黨非合法化と同時に逮捕され、長期間の苛酷な獄中生活が原因で、五九年六月に倒れたが、一書『マウドゥーディーの思想—一つの分析—』を殘した。これは小著ながら題名の示す問題に唯物辨證法的に迫っており、またイスラーム教の發展を歴史的に如何に把握するかという問題についても、示唆に富んだ内容を示している。（Fīroz-ud-Dīn Manṣūr, Maulānā Maudūdī kē Taṣawwurāt, Lahore, 1952.）

⑫ Sayyid Nūr Aḥmad, Martial Law sē Martial Law tak, April 1919—October 1958, Lahore, 1967.

⑬ パキスタン運動史ないしはイスラーム民族運動史に關して、パキスタン人が發表した著書のうち本文中では觸れなかったものをここにいくつか列記しておく。

Khalid bin Sayeed, Pakistan, the Formative Phase, 1857—1948, Karachi, 1960.

K. K. Aziz, Britain and Muslim India, London, 1963.

Hafeez Malik, Moslem Nationalism in India and Pakistan, Washington, 1963.

Syed Sharifuddin Pirzada, Evolution of Pakistan, Lahore, 1963.

Waheed-uz-Zaman, Towards Pakistan, Lahore, 1964.

Ishtiaq Husain Qureshi, The Struggle for Pakistan, Karachi, 1965.

Manzoor-ud-Din Ahmad, Pakistan, the Emerging Islamic State, Karachi, 1966.

Jamil-ud-Din Ahmad, Early Phase of Muslim Political Movement, Lahore, 1967 (3rd edn.).

do., The Final Phase of Struggle for Pakistan, Lahore, 1968 (2nd edn.).

Abdul Hamid, A Brief Survey of Muslim Separatism in India, 1858—1947, Oxford, 1967.

なお、ミントー總督時代のイギリスの對インド政策とインド民族運動を對象とした左のS・R・ワスティーの著書は、實證性が高く、概説的通史の多いパキスタン人の著書の中では特色ある存在となっている。パンジャーブ大學歴史研究所の現所長をしている著者が、かつてロンドン大學に提出した學位論文を發表したのがこの本である。

Sayyid Razi Wasti, Lord Minto and the Indian Nationalist Movement, 1905—1910, Oxford, 1966.

⑭ 'Abdullāh Malik, Bangālī Musalmānōn kī Ṣad Sālah Jahd-i-Āzādī, 1757—1857, Lahore, 1967.

⑮ この他ベンガル史に關するパキスタン人による著書には次の如きものがある。

Moin-ud-Din, Muslim Struggle for Freedom in Bengal, Dacca, 1955.

Abdul Karim, Social History of the Muslims in Bengal, Dacca, 1959.

A. R. Mallick, British Policy and Muslims in Bengal, 1757—1856, Dacca, 1961.

Muhammad Abdur Rahim, Social and Cultural History of Bengal, vol. I, (1201—1576) Karachi, 1963.

Mazharul Haq, The East India Company's Land Policy and Commerce in Bengal, 1698—1784, Dacca, 1964.

A. F. Salahuddin Ahmad, Social Ideas and Social Change in Bengal, 1818—1835, Dacca, n. d.

⑯ Ishtiaq Husain Qureshi, The Administration of the Sultanate of Delhi, Karachi, 1958 (4th edn.).

do., The Administration of the Mughal Empire, Karachi, 1966.

Abdul Karim, Murshid Quli Khan and his Times, Dacca, 1963.

⑰ Pakistan Historical Society, A History of the Freedom Movement, vol. I, II (2 parts), III (2 parts), Karachi, 1957～63.

Ishtiaq Husain Qureshi (general editor), A Short His-

tory of Pakistan, 4 vols. (written by A. H. Dani, M. Kabir, S. A. Rashid, M. A. Rahim, M. D. Chughtai, W. Zaman, & A. Hamid), Karachi, 1967.

⑱ Rashīd Akhtar Nadwī, Maghribī Pākistān kī Tārīkh, vol. I, Lahore, 1965.

⑲ 例えば注⑭に記した本はラホールのウルドゥー語文學促進會議から發行されたものである。ペルシァ語文獻 Shāh Jahān Nāmah (三巻) もここから發行されている。

⑳ 例えばK・K・アジーズは、インド・パキスタン近代史の研究をつきつめれば、それはヒンドゥー・ムスリム間にあった深い龜裂の研究に過ぎないという。(cf. K. K. Aziz, Some Problems of Research in Modern History, Rawalpindi, n. d., p. 6.)

多くの書ではイギリス帝國主義、植民地主義からの解放ということも近代史の基本的なもう一つのモティーフとはされるが、解放運動という場合必ずイギリスとヒンドゥーからの解放運動ということであって、その際ヒンドゥーからの解放ということがより強調され、自分たちの民族運動のもつ指導と同盟の問題、階級構成の問題への歴史的省察は回避されることが多い。一例をあげれば、一九〇五年のベンガル分割反對闘爭についても、パキスタンではインドの歴史學者の評價と正反對であり、分割はヒンドゥー多數派支配からのベンガル・ムスリムの解放のために必要であって、これを中途でひっこめたイギリスはけしからんということになる。十九世紀のパンジャーブ地方村落の階級構成を調べてみると、ヒンドゥー地主=高利貸商人とムスリム小作人という關係を發見することが多いが、ムスリム中の階級對立ももとより嚴在したのである。右のようないわば單純で直線的な觀點は、特に第一次大戰後のイギリスの對インド政策と、分離運動の推進的指導層の階級的性格を考えるとき、當然に問題になってくるであろう。

㉑ パキスタンの軍事費は全體で國家歳出の四分の三を占めるといわれる。大半の民衆は我々の考える最低生活以下の生活を餘儀なくされ、その反面人口の僅か一パーセント程度の資産家は益々富豪となり、失脚したアィューブの如きは十年間の大統領在任中に利權を恣にして、押しも押れもせぬアジアの五大金持の一人として數えられるほどまでになった。昨年十一月から續いた暴動は、こうした民衆の忿懣が爆發したものである。パキスタンの歴史家はこの事態に對して、積極的に問題を提起していく責任があるだろう。

㉒ 古い價値體系に立脚した沒階級的なコミュナルな觀點が廣く社會に存在している限り、自國内の地域・言語・宗教に根ざしたコミュナリズムの問題は解決され得ない。このことは、地方言語別の州再編や自治區設立の運動が續くインドや、パシュトー語を話すパターン族、バローチー語を話すバルチスタン住民のそれぞれの自治要求運動、シンド地方住民のシンディー語公用語化運動、さらにはさまざまな分野における西パキスタン優先に對する東パキスタン住民の抱く根強い反感などの問題をかかえたパキスタンの現實が何よりもよく示している。

㉓ パンジャーブ大學史學科元主任教授S・A・ラシードや前主任教授A・ハミドも社會經濟史研究の缺如に對して反省を促し

ているが、現實には殆んど手懸けられていない。

Shaikh Abdur Rashid, Historical Research and Writing since Independence, Pakistan Quarterly, vol. XV, No. 1&2 (special number), 1967. p. 306.

Abdul Hamid, Presidential Address to the 16th Session of the Pakistan History Conference, held in Karachi on 26, 27, 28 April, 1968.

㉔ 筆者は印・パ再統一の條件を確めるなどという大それた課題を自分なりに用意していたが、パキスタン留學中に試みた二度のインド旅行の經驗をも含めてみるとき、同一の歴史世界と共通の文化圏をもつ兩國の再統一は、雙方が新しい社會體制のもとにおかれるようになった段階においてはじめて可能だという確信を深めた。

㉕ Shaikh Abdul Rashid, op. cit., p. 306~7.

㉖ 一九六四—六五年におけるパキスタン人のイギリス留學生は約二千といわれたが、この傾向は現在では更に強まっていると考えられる。(cf. Twenty Years of Pakistan, p. 424.)

東洋史研究叢刊

第二十一 中國史研究 第一
佐伯 富 著
六八〇頁 附索引
定價 三八〇〇圓

第二十二 宋代科學制度研究
荒木 敏一 著
四六一頁 附索引
定價 三八〇〇圓

第二十三 東洋學研究—歴史地理篇—
森 鹿三 著
五三〇頁 附索引
定價 三八〇〇圓

第二十四 宋代文集索引
佐伯 富 著
八四五頁附檢字表
定價 四〇〇〇圓

右書御希望の方は本會までお申込み下さい(國内送料本會負擔)
京都市左京區吉田本町 京大文學部内
東洋史研究會
振替 京都 三七二八番